

ブラジル日本移民 110 周年と日系社会の今、これから

菊地 義治

2018 年はブラジル日本移民 110 周年を迎えます。本来ならば移民 110 周年記念は日系社会の周年事業であり、数年前より準備計画が行なわれる日系社会の一大記念事業であります。

ブラジル移民は 1908 年、笠戸丸にて 781 名の日本移民がブラジルの地に渡り、幾多の困難を克服されながら、現在の地位を確立されてきました。それは先駆移住者が筆舌に表せない境遇を乗り越えてこられた人生の縮図でもありました。戦前移住者 19 万人、戦後移住者は 6 万人と総数では 25 万人、現在では日系人の総人数は 190 万人となり、大きな日系社会を形成されるまでになり、ブラジル社会のありとあらゆる分野に進出しており、日本人の信頼、信用、勤勉さはブラジルの多民族文化の中では稀に見る希少価値のある文化形成を作り上げております。それは多民族国家ブラジルという母体の中で育まれた日本の伝統文化とその継承に、長年努力された人々やそれを温かく受け入れた社会があったからだと思われ

ます。戦前、戦後の日本国の目覚ましい繁栄と日本古来の伝統文化が統合され、新しい国ブラジル国家は多民族の集合体として新しい文化を受け入れるものがあったからだと思います。日本移民の勤勉と正直さは他の民族には見られない信用をブラジルの地に定着させることが出来ました。現在のブラジル社会での

日系人はあらゆる分野に於いて社会の重要な責任と役割を果たしております。

ブラジルは多民族国家であり自己主張の国で、残念ながら憂国の士の生まれる伝統文化を醸成する環境は整っておりません。ブラジルは世界の注目を集める農業生産国に発展、世界でも類を見ない豊かな資源と人口密度の高い中南米一の経済大国になれる資質を持ちながら低迷の枠を出切れない国でもあります。その弱点は抱える各国の集団民族に共通の主権の理念が無いことによります。国土は温帯地であり、気候風土も良く、政治経済の安定が出来れば近い将来大国になれる素質があります。

日系社会は全ブラジル人口の 1% ぐらいでありながら、ブラジルの生産活動には多大な役割を果たしております。就労、就学、起業、経済文化活動において他の民族に見られない特色を持ち、移民社会の中でも他民族と融和しながら自国の文化を継承しております。組織団体の運営がうまく、食の文化、伝統文化の継承や古き、よき物を次世代に引き継ぐことを率先して行っており、他の民族よりも注目される団体活動をしており、大いに他に影響を与え、参考にもなっていると思います。

日系社会も世代交替しながら、四世、五世、六世の世代交代に移り、日系であることを意識せず社会行動をするブラジル人としてのプライドを持つ人た



第 20 回日本祭りの郷土食ブースの賑わい。入場者数は約 20 万人になった。(2017 年 7 月 21 ～ 23 日。提供：ブラジル日本都道府県人会連合会)



第 20 回日本祭り、盛況な郷土食ブース

ちもたくさんおります。他の民族との結婚、交流も多くなり、混血も普通になり、日系人であることに特別の意味を持たない人々も多くなっております。しかし、東洋人は顔形が違いますので、いつまでも東洋人、日本人と見られます。せっかくの日本人の血を引く民族意識を大切にしながら、日本の伝統文化を受け継ぎ、日本との新しい絆を大切に、県出身者は県との留学研修、国との技術革新を促しながら、新しい時代にあった文化経済交流の輪を広げることが大切であります。

ブラジルの日系社会も各地に団体活動拠点があり、多い時には800もありました。時代の流れに左右され、現在では統合されながら、400くらいに減少しております。その活動を活発化するためにも、日系社会最大の催しである日本祭りのような社会の活性化を図る必要に迫られております。

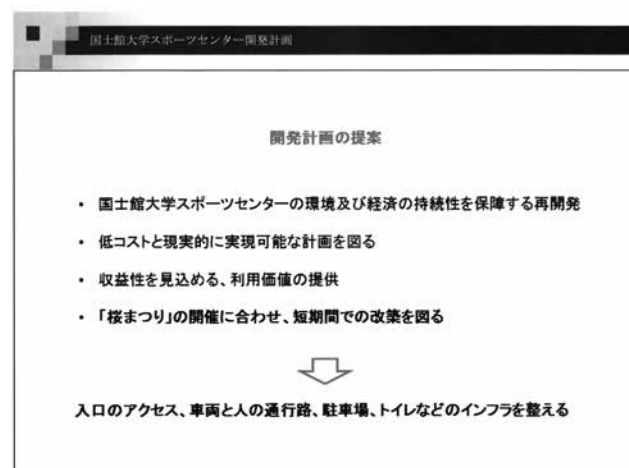
例えば日本語の普及であり、日本文化の継承者の育成や各地に散在する団体活動の統合による活性化を生み出すことです。各地に点在するものを統合する施設が必要であります。日本の文化経済の接点を作り出すことが大切であり、移民110周年は埋没する日系社会ではなく、先人の開拓精神を受け継いだ日系人がブラジル社会の中で新しい社会の活性化と新時代に即応した組織作りへ向けた改革の必要に迫られております。

日本移民110周年記念式典は今までと違って、日本都道府県の日本祭りと共同開催することにより、経済文化と集客力に於いて多大な発展を見ることが出来ます。両国政府の要人、日本よりの皇室のご来伯により、盛大に記念式典が挙行されます。祭典は盛大であっても一過性のものであり、終了すると忘れられます。

そこで此の度は特別記念事業として日系社会が抱える諸問題も含めて今後の日系社会の基盤作りを提言計画実行したいと思います。これまでの周年記念事業は日系社会の必要事業として移民開拓先没者慰霊碑、イビラプエラ日本館、移民資料館、皇太子来伯記念講堂、日伯友好病院、あけぼの特別養護老人ホーム等を建設してまいりました。

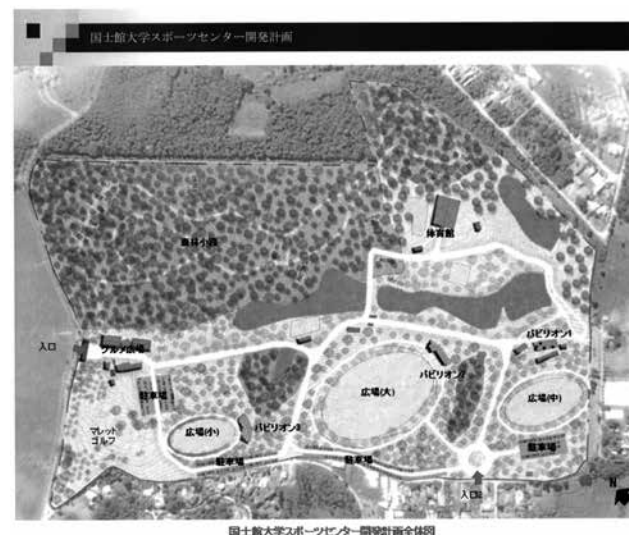
今回は日系社会の未来を切り開く60万km²の広大な大地に5カ年計画として国土館より20数年前に譲渡された地を移住120年、150年、200年を見据えた記念事業にしたいと考えております。日系社会の多目的イベント会場作りです。桜祭り、現在3万人規模の

図1：国土館大学スポーツセンター開発計画の概要



(出所：実行委員会発行冊子より)

図2：国土館大学スポーツセンター開発計画全体図



(出所：図1に同じ)

参加があり、国際民族舞踊祭、農業展示会、全ブラジル日系人祭り、県人会のブロック祭、野外音楽祭、将来の日本祭り会場、日本ブラジル合同博覧会、スポーツを通じた日系社会の総合交流の場としてのシンポジウムや各団体の記念事業等、日系団体の総合会場として全ブラジルの中心的役割を担っていくことになります。

今後の日系社会の文化の発信地点となり、日本政府のジャパンハウスの持続可能性を支援し、ブラジルでの日本政府との連携により、日本企業や新しい産業開発の拠点となり、両国発展の場となり、文化協会が全ブラジル中央の役目を果たすべく、日本との政治経済文化の一本のパイプ役となります。日本とブラジルの新しい時代は南米に存在する移住者子

弟との連携による活動の輪を広げ、日系社会を通じた経済文化親善の交流をますます盛んにすることが大切です。人材の育成や貿易経済投資こそが今後の両国関係強化に繋がります。先駆移民が築いた努力精進こそが日系子弟や日本企業の進出に貢献され、ブラジルの繁栄に寄与されていきます。

三世子弟の就学就労ビザや高齢者社会の変遷の中、時代の流れをしっかりと把握し、精神文化を守りながら、その国での最善の努力を惜しまず、両国の発展に強い絆を結び、世界経済の混沌とした中でブラ

ジル・日本両国が一緒に力を合わせて繁栄に関わっていくことこそ世界平和への第一歩になります。日系社会の安定と経済成長の実現こそ、本当のブラジル日系社会が目指す先駆者たちへの報恩にもなります。移民 110 周年記念事業は日本とブラジル両国にとり、新世紀への未来に羽ばたく架け橋なのです。

(きくち よしはる ブラジル日本移民 110 周年記念祭典委員会
実行委員長)

ラテンアメリカ参考図書案内



『多文化共生地域福祉への展望 —多文化共生コミュニティと日系ブラジル人—』

朝倉 美江 高菅出版
2017 年 9 月 263 頁 2,700 円+税 ISBN 978-4-901793-76-6

国境を越えた移動が増え、近年は多様な国籍、言語、文化をもった人たちが我々と同じコミュニティで生活を営んでいるが、定住化により多文化共生政策が課題となり、また中には生活に困窮し支援を要する人たちも出てきていることから、社会保障制度面の対応や雇用支援も含む「地域福祉」という観点を合わせ取り組む必要が出てきた。本書は 1980 年代後半から日本に移動（還流）してきた日系ブラジル人に焦点を当てて、国境を越えて移動してきた人たちの生活を誰が、どのように支援することが出来るか？ 入れ替わりも多い多様な人たちと生活を営むコミュニティのあり方を総合的に論じたもので、著者は社会福祉の現場でも働いた経験を有し、社会福祉学を専門とする金城大学教授。

東日本大震災に遭遇した被災者と日系ブラジル人との絆の意味、「不安定定住」という生活問題の指摘から始め、グローバル化の中でのデカセギと日系ブラジル人とは何か、彼らのブラジル移住の歴史とその中で助け合うために生みだした文協・援協や国外労働者・同帰国者支援センター等の日系人組織の現状、デカセギで来た人たちの帰国（逆流）後の生活の実状、岐阜県の調査に基づくトランスナショナルな移住生活者の実態、日本と同じく移民受け入れ後進国であった韓国の移民政策とその推進に努めてきた民間団体の活動、日本の人口減少が進む中で労働力として期待されている移民問題と外国人労働者の雇用破壊との連動、地域社会の課題となってきた地域福祉と多文化共生におけるグローバルなコミュニティの位置付け、多文化共生地域福祉の実践事例と構築のため自発的に行う「民間性」、多様な国々からの人たちを受け容れる「多様性」、移動することを前提とし多文化生活支援システムをもつコミュニティにする「流動性」、移民を労働者としてしか捉えない契約労働者の人権を尊重する「グローバルなコミュニティ」の 4 つの視点を提起し、最後に多文化共生地域福祉への挑戦として、地域での生活を支える雇用の創出と地域づくりについて論じている。在日日系ブラジル人をめぐる課題について、歴史と背景、実際の生活状況を紹介し、移民政策の国際比較とあるべき姿を論じ、日本人すべてが考えるべき対応の提示に至るまでを網羅した労作である。

(桜井 敏浩)



『世界からバナナがなくなるまえに —食糧危機に立ち向かう科学者たち』

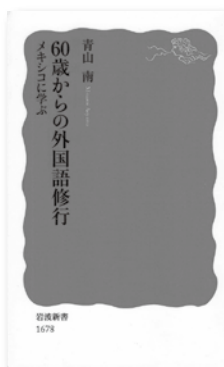
ロブ・ダン 高橋 洋訳 青土社

2017年8月 396頁 2,800円+税 ISBN978-4-7917-7005-2

食事をキャッサバ（ユカ／マニオク）、トウモロコシ、米などのうち一種類に依存し、生物多様性とは正反対の画一性の危機に直面している人たちが少なからずいる。バナナの栽培で1950年代にグアテマラの経済を支配していた米資本のユナイテッド・フルーツ社をはじめ、バナナ産業は生産効率と品質の安定のために種子を結ばず地下茎から生え出す吸枝の挿し木によりクローン栽培され、世界中で輸出用バナナのほぼすべてが遺伝的に同一種になっているが、もし病気や害虫が拡散すればそれは作物に広範かつ壊滅的な打撃をもたらす。このリスクはバナナのみならずトウモロコシ、ジャガイモ、コーヒー、茶、カカオ、米、ゴムなどにも共通しており、人類が安価で季節に関係なく基本的な欲求を満たそうとすれば農業は単純化され大規模生産が拡大するが、それは生命の多様性とは逆行するものである。本書は、生命の多様性を守ること作物と人類を救おうと闘う科学者たちの物語りである。

アンデス原産のジャガイモがアイルランドの慢性的飢餓を救ってきたが1846年の疫病でほぼ全滅し100万人以上の餓死者を出し、同じく米大陸から持ち込まれたキャッサバが1970年にコンゴで虫害によってアフリカの農民に壊滅的な打撃をもたらしたことなど、現代史上での食料飢饉の例を挙げた後、アグリビジネス企業による病原体や害虫に対応する農薬・殺虫剤の普及と耐性病原菌・害虫との限りない競争、天敵昆虫等の導入や遺伝子操作種子による対処、科学者たちの遺伝学の基礎資料となる伝統作物品種保存のための世界種子貯蔵庫の設立など、現在の動向を数多く紹介している。現在、普段は豊富にあるのが当たり前と考えている作物が大きな危機に晒されていることを知らせ、私たちが食物を無駄にしないこと、植物飼料を大量に使う肉の摂取を減らすこと、そして庭や鉢植えでもよいから作物を育てて栽培方法だけでなく害虫、病原体、花粉媒介の共生生物観察をすることにより、作物研究の裾野を広げることが提唱している。著者は米国の進化生物学者。

〔桜井 敏浩〕



『60歳からの外国語修行 —メキシコに学ぶ』

青山 南 岩波書店（新書）

2017年9月 246頁 820円+税 ISBN978-4-00-431678-7

米文学の翻訳者で大学でも教えている著者が、61歳になった時に1年間の研究休暇を利用してメキシコにスペイン語を学ぶために留学した際の悪戦苦闘の経過報告。米作家の小説にも地名のみならずスペイン語が少なからず出てくるし、ロサンジェルスでのブックフェアに行った時に米国がスペイン語に占領されつつあることを実感したこと、好きな作家達がメキシコの魅力を述べ、小説の舞台にしていることから、留学先はメキシコと決め2010年にグアダハララに赴き、外国人向けスペイン語学校に通い老姉妹の家に下宿する。

そこから始まった下宿の家主、級友、教師、近隣の住民となかなか通じないスペイン語修行の格闘の日々を、いろいろな場面での体験で知ったスペイン語表現とともに、ユーモアを交え紹介している。さすが翻訳の世界で生きてきた著者だけに、英語とスペイン語の違いや共通点などの指摘、視点は核心を突いていて面白く読ませる。

〔桜井 敏浩〕